

1 次形式と双対空間

●数ベクトル空間上の 1 次形式

\mathbb{R}^n から \mathbb{R} への線形写像 (線形関数) $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ は, \mathbb{R}^n 上の 1 次形式 (もしくは線形形式) ともよばれる. つまり, 1 次形式は $1 \times n$ 行列 A を用いて,

$$f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x} \quad (1.1)$$

と表されるものである. より具体的に $A = (a_1 \ a_2 \ \cdots \ a_n)$ とすると, 1 次形式 f は

$$f: \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \mapsto A\mathbf{x} = (a_1 \ a_2 \ \cdots \ a_n) \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = a_1x_1 + a_2x_2 + \cdots + a_nx_n$$

という式で与えられる.

\mathbb{R}^n 上の 1 次形式全体のなす集合を $(\mathbb{R}^n)^*$ で表す. 任意の $f, g \in (\mathbb{R}^n)^*$ と $k \in \mathbb{R}$ に対して, 和 $f + g$ およびスカラー倍 kf を

$$\begin{aligned} (f + g)(\mathbf{x}) &= f(\mathbf{x}) + g(\mathbf{x}) \\ (kf)(\mathbf{x}) &= kf(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

で定義する. このとき, $f + g, kf \in (\mathbb{R}^n)^*$ であり, この和, スカラー倍は線形空間の公理を満たすことが確かめられる. (Web「一般の線形空間」の定義 1 を参照せよ.) つまり, $(\mathbb{R}^n)^*$ は線形空間である. $(\mathbb{R}^n)^*$ を \mathbb{R}^n の双対空間とよぶ.

注意 1. $f \in (\mathbb{R}^n)^*$ を表す行列を A とし, $g \in (\mathbb{R}^n)^*$ を表す行列を B とする. すなわち, $f, g \in (\mathbb{R}^n)^*$ が $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}, g(\mathbf{x}) = B\mathbf{x}$ で与えられているとする. このとき, $f + g$ を表す行列は $A + B$ であり, kf を表す行列は kA である.

一方, $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}$ であるとき, f と A を同一視してしまえば,

$$(\mathbb{R}^n)^* = \{A \mid A \text{ は } 1 \times n \text{ 行列}\}$$

と解釈される. ここで, $1 \times n$ 行列は n 項横ベクトルでもあるのだから

$$(\mathbb{R}^n)^* = \{A \mid A \text{ は } n \text{ 項横ベクトル}\}$$

といってもよい. この解釈の下で, $(\mathbb{R}^n)^*$ における演算 (和・スカラー倍) は, 横ベクトルに関する演算 (和・スカラー倍) に一致する. このことから, $(\mathbb{R}^n)^*$ がベクトル空間となるのは当然のことといえる. また,

$$\dim(\mathbb{R}^n)^* = n$$

もわかる.

補足: \mathbb{R}^n の元は縦ベクトルであると約束してあるので, $(\mathbb{R}^n)^*$ の元は横ベクトルなのである.

●一般のベクトル空間上の1次形式

V を (一般の) 実ベクトル空間とする. 線形写像 (線形関数) $f: V \rightarrow \mathbb{R}$ は, V 上の1次形式 (もしくは線形形式) ともよばれる. V 上の1次形式全体のなす集合を V^* で表す. 任意の $f, g \in V^*$ と $k \in \mathbb{R}$ に対して, 和 $f + g$ およびスカラー倍 kf を

$$(f + g)(\mathbf{x}) = f(\mathbf{x}) + g(\mathbf{x})$$

$$(kf)(\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x})$$

で定義する. このとき, $f + g, kf \in V^*$ であり, この和とスカラー倍は線形空間の公理 (Web「一般の線形空間」の定義1) を満たすことが確かめられる. つまり, V^* は線形空間である. V^* を V の双対空間とよぶ.

これ以降, 断らない限り, V は $\dim V = n (\neq 0, \infty)$ の実ベクトル空間を表すものとする. まず, 次の補題を用意しておく.

補題 2. $f, g \in V^*$ が $f = g$ であるためには, V の基底 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$ に関して $f(\mathbf{v}_i) = g(\mathbf{v}_i)$ ($i = 1, 2, \dots, n$) であることが必要十分である.

(補題 2 は, Web「一般の線形空間 (増補版)」の命題 14 の特別な場合に過ぎない. 証明は (自らつけるか) そちらを参照せよ.)

$\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$ を V の基底とする. $\alpha^i \in V^*$ ($i = 1, \dots, n$) を

$$\alpha^i(\mathbf{v}_j) = \delta_j^i = \begin{cases} 1 & (j = i \text{ のとき}) \\ 0 & (j \neq i \text{ のとき}) \end{cases}$$

により定義する. 補題 2 より, 任意の $\mathbf{v} \in V$ に対して, $\alpha^i(\mathbf{v})$ を定めたといえる. 念のため詳述すると, 任意の元 $\mathbf{v} = \sum c^j \mathbf{v}_j \in V$ に対しては

$$\alpha^i(\mathbf{v}) = \alpha^i(\sum c^j \mathbf{v}_j) = \sum c^j \alpha^i(\mathbf{v}_j) = \sum c^j \delta_j^i = c^i \tag{1.2}$$

というように値が決まるのである.

注意 3. 和を表す記号 \sum を省略することがしばしばある. 例えば (1.2) は

$$\alpha^i(\mathbf{v}) = \alpha^i(c^j \mathbf{v}_j) = c^j \alpha^i(\mathbf{v}_j) = c^j \delta_j^i = c^i$$

というように書く. 記号 \sum を省略してしまったら, 混乱や誤解を招くのではないかと思われるかもしれないが「上下に同じ添え字があるときは, その添え字に関して和をとる」と心にとどめておけばよい. このような記法を **Einstein** の規約とよぶ. 本ノートでもこの Einstein の規約に従うこととする.

命題 4. V の基底 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$ に対し, $\alpha^i(\mathbf{v}_j) = \delta_j^i$ で定めた $\alpha^1, \alpha^2, \dots, \alpha^n$ は V^* の基底をなす. したがってとくに $\dim V^* = \dim V$.

ここで $\alpha^1, \dots, \alpha^n$ の右上にあるのは添え字 (番号づけ) であって, 累乗を表しているのではないことに注意せよ. 以下に説明する Einstein の規約の観点から, 番号付を右上に記すと便利な場合がある.

(証明). 1次関係 $c_1\alpha^1 + c_2\alpha^2 + \dots + c_n\alpha^n = \mathbf{0}$, すなわち, $c_i\alpha^i = \mathbf{0}$ が成り立つとする. このとき, 任意の j に対し

$$c_i\alpha^i(\mathbf{v}_j) = 0, \quad \therefore c_i\delta_j^i = 0, \quad \therefore c_j = 0$$

でなければならない. これは $\alpha^1, \alpha^2, \dots, \alpha^n$ が 1次独立であることを意味する.

次に, $\mathbf{f} \in V^*$ を任意の 1次形式とする. \mathbf{v}_i の \mathbf{f} による像 $\mathbf{f}(\mathbf{v}_i)$ が $\mathbf{f}(\mathbf{v}_i) = f_i \in \mathbb{R}$ であるとする. このとき 1次結合 $f_j\alpha^j$ を作れば, $(f_j\alpha^j)(\mathbf{v}_i) = f_i$ となるから, $\mathbf{f} = f_j\alpha^j$ と結論される. (補題 2.) したがって, 任意の $\mathbf{f} \in V^*$ は $\alpha^1, \alpha^2, \dots, \alpha^n$ の 1次結合で書けること, すなわち, $V^* = \text{Span}\{\alpha^1, \alpha^2, \dots, \alpha^n\}$ がわかった.

ゆえに $\alpha^1, \alpha^2, \dots, \alpha^n$ は V^* の基底である. □

定義 5. V の基底 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$ に対し, 条件 $\alpha^i(\mathbf{v}_j) = \delta_j^i$ で定まる $\alpha^1, \alpha^2, \dots, \alpha^n \in V^*$ を $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$ の双対基底とよぶ.

V の基底を取り替えたとき, 双対基底にはどのような変化が起こるかを調べておこう.

$\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ を V の基底とし, $\tilde{\mathbf{v}}_1, \dots, \tilde{\mathbf{v}}_n$ もまた V の基底であるとする. これらについては, ある $n \times n$ 正則行列 P が存在して

$$(\tilde{\mathbf{v}}_1 \ \dots \ \tilde{\mathbf{v}}_n) = (\mathbf{v}_1 \ \dots \ \mathbf{v}_n)P \tag{1.3}$$

が成り立つ.

一方, $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$ の双対基底を $\alpha^1, \dots, \alpha^n$ で, $\tilde{\mathbf{v}}_1, \dots, \tilde{\mathbf{v}}_n$ の双対基底を $\tilde{\alpha}^1, \dots, \tilde{\alpha}^n$ で表すこととしよう. 式 (1.3) の両辺に左から ${}^t(\alpha^1 \ \dots \ \alpha^n)$ を作用させると

$$\begin{pmatrix} \alpha^1 \\ \vdots \\ \alpha^n \end{pmatrix} (\tilde{\mathbf{v}}_1 \ \dots \ \tilde{\mathbf{v}}_n) = \begin{pmatrix} \alpha^1 \\ \vdots \\ \alpha^n \end{pmatrix} (\mathbf{v}_1 \ \dots \ \mathbf{v}_n)P = I_n P = P$$

を得る. 更に, 上の式の両辺に左から P^{-1} を掛けて

$$P^{-1} \begin{pmatrix} \alpha^1 \\ \vdots \\ \alpha^n \end{pmatrix} (\tilde{\mathbf{v}}_1 \ \dots \ \tilde{\mathbf{v}}_n) = I_n$$

を得る. これは

$$\begin{pmatrix} \tilde{\alpha}^1 \\ \vdots \\ \tilde{\alpha}^n \end{pmatrix} = P^{-1} \begin{pmatrix} \alpha^1 \\ \vdots \\ \alpha^n \end{pmatrix} \tag{1.4}$$

すなわち

$$(\tilde{\alpha}^1 \ \dots \ \tilde{\alpha}^n) = (\alpha^1 \ \dots \ \alpha^n) {}^t P^{-1} \tag{1.4'}$$

を示す.

以上でわかったことを補題としてまとめておく.

補題 6. V の二組の基底に (1.3) の関係式があるとき, 対応する双対基底には (1.4) の関係式が生ずる.

必ずしも数ベクトル
ではないベクトルを
横に並べるような記
法については, Web
「基底の変換」を参照
せよ.

ベクトル $v \in V$ をひとつ固定したとき, $\Phi_v: V^* \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$\Phi_v(f) = f(v) \tag{1.5}$$

というように定義してみる. このとき, Φ_v は線形空間 V^* から \mathbb{R} への線形写像である. なぜなら

$$\begin{aligned} \Phi_v(f+g) &= (f+g)(v) = f(v) + g(v) = \Phi_v(f) + \Phi_v(g), \\ \Phi_v(kf) &= kf(v) = k\Phi_v(f) \end{aligned}$$

であるから. つまり,

$$\Phi_v \in (V^*)^*$$

である. 命題 4 より $\dim(V^*)^* = \dim V^*$ であるから, $\dim(V^*)^* = n$ である.

v_1, \dots, v_n を V の基底とし, $\alpha^1, \dots, \alpha^n$ をその双対基底としたとき,

$$\Phi_{v_i}(\alpha^j) = \alpha^j(v_i) = \delta_i^j$$

が成り立つから, $\Phi_{v_1}, \dots, \Phi_{v_n} \in (V^*)^*$ は, $\alpha^1, \dots, \alpha^n \in V^*$ の双対基底である. 更に, 各 $v \in V$ に Φ_v を対応させること

$$L: V \ni v \mapsto \Phi_v \in (V^*)^*$$

を考えてみると, L は線形写像であり (問: 確かめよ.), L は基底 v_1, \dots, v_n を基底 $\Phi_{v_1}, \dots, \Phi_{v_n}$ へ写している. これは L が線形同型写像であることを意味する.

得られたことを定理としてまとめておく.

定理 7. $(V^*)^*$ は V に線形同型である.

定理 7 (およびそれを導いた過程) より, $v \in V$ と $\Phi_v \in (V^*)^*$ を同一視することで,

$$V = (V^*)^*$$

として扱ってもよいことがわかる. とくに Φ_v を単に v と書いてしまうことも許されよう. その場合, (1.5) は

$$v(f) = f(v)$$

と表されることになる. これは, $v \in V$ と $f \in V^*$ に対し, 値 $f(v)$ をとることは, v から見ても f から見ても '対等' であることを表している. このことから,

$$\langle f, v \rangle = \langle v, f \rangle (= f(v))$$

のような記法を使うこともよくある. \langle, \rangle は $V^* \times V$ 上の (もしくは $V \times V^*$ 上の) 双 1 次形式であるということもできる.

線形空間 V^* に対して命題 4 を適用するということ.

$\dim V = \infty$ のときは, この定理は必ずしも成り立たない.